

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：17101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770163

研究課題名(和文)古代日本語における形式名詞述語文の構文構造史的研究

研究課題名(英文)The Formal Nouns Predicate Sentences in Syntactic Structure of Ancient Japanese

研究代表者

勝又 隆(KATSUMATA, Takashi)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60587640

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、古代日本語において連体修飾節を伴う形式名詞を述語に持つ構文(以下、形式名詞述語文)の構造と変遷について考察することである。研究期間全体では主に、(1)中古和文における、連体ナリ文・連体ゾ文・モノナリ文・モノゾ文の特徴と差異、(2)上代と中古における「述部に現れる形式名詞」の分布状況の違いについて、調査・考察を行った。

その結果、上代から中古にかけて述部に現れる形式名詞の種類が飛躍的に増加し、モノナリ文・モノゾ文以外の形式名詞述語文は、従属節から主節へと「節の名詞化」が拡大することで形式名詞述語文として成立したという仮説を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study is to examine the structure and changes in the structure of sentences, with the formal noun predicate sentences in Ancient Japanese. Throughout the research period, (1) characteristics of and differences between adnominal adjective nari sentences, adnominal adjective zo sentences, mono nari sentences, and mono zo sentences in Early Middle Japanese and (2) differences in the distribution status of the “formal noun appearing in the predicate” in Old and Early Middle Japanese were surveyed and examined.

As a result, the following hypothesis could be obtained. From Nara period to Heian period, the types of formal nouns that appeared as predicates increased exponentially, and formal noun predicate sentences other than mono nari sentences and mono zo sentences came to be established as formal noun predicate sentences by the expansion of the “nominalization of clauses” from the subordinate clause to the main clause.

研究分野：日本語学

キーワード：形式名詞 文末名詞文 体言締め文 モノナリ・モノゾ文 連体ナリ・連体ゾ文 係り結び 文法史
構文構造

1. 研究開始当初の背景

日本語史において、院政・鎌倉期頃を境にそれ以前(主として奈良時代から平安時代)を古代語とし、それ以後を近代語とすることが広く行われている。そして、その根拠としてしばしば言及されるのが、活用語における終止形と連体形の合一(連体形への統合)と「係り結び」の衰退と消滅、格関係の明示化(特に主格と対格)である。古代語においては平叙文の主格や対格は無助詞であることが一般的であったが、従属節や述語が連体形となる際等にはしばしば主語に助詞ガ・ノ、目的語に助詞ヲが下接した。また、係助詞コソ以外の係り結び構文は連体形終止である。つまり、終止形と連体形の合一は、「係り結び」の衰退と消滅や格関係の明示化と連動した現象と考えられている。

その要因としては従来、曲調表現であった連体形終止文(いわゆる「連体形止め」)が次第に新鮮味を失い一般化していったとする説(主として日本語学の概説書に見られる記述)や、連体形そのものに注目し形態音韻論的観点から「示差性」をその要因とした坪井美樹『日本語活用体系の変遷』(2001年、笠間書院)また、文法面における古代語から近代語への変化を「係結的断続関係」から「論理的格関係」への変化と見なし、係り結び構文の衰退を中心に考える立場もある(森重敏『日本文法通論』(1959年、風間書房)尾上圭介『文法と意味』(2001年、くろしお出版)等)。後者は、社会情勢の変化(武家政権の誕生)から、気心の知れない未知の相手との交渉の必要が生じ、係り結び構文のような感覚的表現を避け、論理的格関係を明示するという変化の方向を決定づけたとする、外的要因の考察を導いた。

これらの先行研究には重要な示唆を含むものが多い一方で、連体形終止文、連体形、係り結び構文はそれぞれ個別に論じられてきた。しかし、古代語の終止形が消え、形態面で連体形に合一するという現象は、文終止において起きた現象であり、形の上では連体形で終止する文が拡大したという側面を持つ。また、連体形述語を持つ構文は係り結び構文と連体形終止文だけではない。

連体形接続の終助詞(ソ(ゾ)等、係助詞の文末用法とされるものも含む)構文もそうであるし、連体形接続のナリ(以下、連体ナリ)は上代には見られず、中古以降確例が現れる。連体ナリは、係助詞の結びや連体節(名詞修飾)には現れないことも知られており、文終止体系の変化を考える際に重要な構文である。そして、形式名詞にコピュラ(古代語ではソ(ゾ)やナリ、現代語ではダ/デア/デス等)が下接した構文も形式上は名詞述語文であるが、文法機能の拡大が見られ、文法化が生じたと見なせるものも一定数観察される。

また、信太知子「句を構成する用言よりみた連体形準体法 古代語と現代語を対照さ

せながら」(2002年、『神女大國文』13(神戸女子大学国文学会))は、連体形準体法(連体形による準体節)が主語や目的語として用いられる際に比して、述語として用いられる際には異なる傾向が見られることを指摘している。述語という構文環境、ひいては連体形が述語となる構文の特性として捉える視点が必要である。

係り結び構文や、連体ナリ文、連体形準体法等は古代語の特徴であり、現代語には見られない。一方、形式名詞述語文は古代から現代まで「連体節+形式名詞+コピュラ」という基本構造は変わらない。

古代語の体系を単に記述するだけでなく、通時的にその変遷過程とその動因を明らかにするためには、何らかの基準が必要となる。古代語の文終止体系と構文構造の史的変遷を考察する上で、この形式名詞述語文を軸に他の構文との共通点や相違点を記述していくことが有効だと考えられる。報告者は申請以前に、形式名詞モノによる形式名詞述語文、モノゾ文やモノナリ文についての論考を複数公表している。また、口頭発表としても「古代日本語におけるモノナリ文と連体ナリ文の構造的差異について」(2013年9月、西日本国語国文学会、熊本大学(招待発表))および「モノナリ文の特性とモノゾ文の「推量用法」」(2013年10月、日本語学会2013年度秋季大会、静岡大学)を行っている。

これらの考察から、モノゾ文やモノナリ文を正確に記述するためには、述語用言の種類、形式名詞そのものの性質、コピュラ、それぞれ特性を個別に見ることで説明しようとするのではなく、それらの組み合わせによってどのような特性が生まれているのかという構文構造のあり方を見る必要があるという着想が得られた。

2. 研究の目的

本研究は、古代日本語において連体修飾節を伴う形式名詞を述語に持つ構文(以下、形式名詞述語文)について、係り結び構文や連体形接続の助詞ゾや助辞ナリによる構文、および連体形終止文等の類似の構文との共通点・相違点を記述し、その構文構造を分析することを通して、古代日本語の文終止体系および構文構造の変遷について考察することを目的とする。

古代語から近代語への変遷において、活用形や助詞・助辞、準体句等に変化が見られる中、形式名詞述語文は、古代から現代にかけて「連体節+形式名詞+コピュラ」という基本構造は変わらない。この構文を軸に古代語の構文構造史の記述を試みる点が本研究の特色である。

3. 研究の方法

研究開始時に想定していた研究の方法は、以下の(1)~(7)のとおりである。

- (1)モノナリ文とモノゾ文の特性とその差異、およびその原因について明らかにする。
- (2)連体ナリ文とモノナリ文の特性および共通点と相違点を記述し、両構文の関係について考察する。
- (3)形式名詞コト・ヤウ・サマの上代・中古の用例を採集する。
- (4)形式名詞モノ・コト・ヤウ・サマによる形式名詞述語文についてその特性や共通点、相違点について考察する。
- (5)中古の連体ゾ文の用例を採集し、その用法や特性を記述し、モノゾ文やモノナリ文との共通点や相違点を明らかにする。
- (6)中古のゾ・コソによる係り結び構文の用例を採集し、上代との共通点と相違点について考察する。
- (7)(1)～(6)の成果をそれぞれ、あるいはまとめるべきはまとめた上で、口頭発表や論文の形で公表する。

(1)は研究期間以前にある程度調査済みであるが、本研究課題全体に関わるため載せている。

(2)は、疑問文になるか、従属節になるか、主語にガ・ノが下接するかといった構文的特徴について複数の観点から検証し、両構文の共通点と相違点を明らかにするものである。

(3)では、形式名詞述語文の実態を相対的に判断できるようにするため、形式名詞が述部や補語のどの位置に現れるのかについて分布を調査する。研究成果で述べるとおり、上代の分布に著しい偏りがあったため、(4)はモノとコトに限定して調査を行う方針に変更した。

(5)は、連体ゾ文の文意味が現代語のノダ文と類似していることから、知識表明文・判断実践文・想起文のどのタイプの文にどの程度現れるのかを調査するものである。

(6)は計画を変更し、中古のコトナリ文がコトニテ・コトナレバの形で従属節を作り、原因理由節となる場合について、その機能や特徴、「節の体言化」の有無などについて調査することとした。これは研究成果の欄で述べるとおり、(2)の調査により、コトナリ文の終止形終止文ではコトが名詞性を保っていることや、(3)の調査で上代と中古で形式名詞述語文の分布が大きく異なることが明らかになったため、どのように用法が拡大していくのかという観点を導入する必要が生じたためである。

4. 研究成果

(1)古代日本語におけるモノナリ文と連体ナリ文の差異について、以下のことを述べた。

「係り結び」との共起は、連体ナリ文には見られないが、モノナリ文には上代・中古ともに見られる。

主語に下接するガ・ノは、連体ナリ文には

現れるが、主節のモノナリ文には上代・中古ともに観察されなかった。モノナリ文のこの特徴は、用言述語文の終止形終止用法の場合と共通する。

モノナリ文と連体ナリ文は、構造、用法の点で差異が大きく、モノナリ文から連体ナリ文への通時的な連続関係は認めがたい。

から、モノナリ文は普通の名詞述語文と用言述語文の両方の特徴を持つ構文であると言える、現代語の文末名詞文(体言締め文)との類似が指摘できる。

モノナリ文以外に の特徴を持つ形式名詞述語文は少ないため、モノによる形式名詞述語文の特徴がより明確になった。

また、形式名詞述語文や類似の構文について、構文毎の緻密な調査が必要であることも確認できた。

(2)上代においてモノ以外の形式名詞(と見なされうる抽象的な意味を担う名詞)が「連体形+名詞」節を構成する際の分布について調査し、以下の点を指摘した。

上代においてはモノ・コトを除くと「連体形+形式名詞」節が種類、用例数ともに少ない。

「連体形+モノ」節は述部にはよく現れるが、補語の例は稀である。

「連体形+コト」節は、補語にはよく現れるが、述部にはあまり現れない。

モノは「連体節+モノソ/モノナリ」、コトは「連体節+コトアリ/ナシ」がそれぞれ上代における主用法である。

なお、元の計画ではコト、ヤウ、サマについて考察する予定であったが、上代の使用範囲が予想よりも限定的であることがわかった。そのため、計画を修正し、モノとコトに注目することとした。(1)の調査時点で、中古においてはモノ以外の形式名詞述語文も珍しくないことがわかっていった。そのため、上代から中古にかけて形式名詞述語文が急激に増えたと言える。

ただし、これが上代と中古の言語の問題であるか、資料の制約によるものなのかは確定できない。今後、さらなる調査や検証が必要である。

(3)中古における「連体形+コトナリ/コトゾ」文について、以下の点を指摘した。

上代には稀であったが、中古にはコトナリ文、コトゾ文ともに珍しくなくなる。

コトナリ文・コトゾ文はともに判断実践文に現れる。これは連体ナリ文・モノナリ文とは異なる特徴である。

コトナリ文は疑問文にもなる。これはコトゾ文、モノナリ文、連体ナリ文とは異なる特徴である。

上代にもわずかながら用例が見られるコトナリ・コトゾについて調査した。(1)で得た見通しどおり、構文によってそれぞれ異なる構文的特徴を持つことがより明確になった。

(4)上代における助詞ソによる係り結び構文について、以下の点が明らかになった。

文の焦点は必ずしもソの直上の語句のみではなく、「焦点化構文」と捉える際には焦点化という概念について慎重な定義が必要であること。

ソによる係り結び構文の直後に文が続く場合は、並列の例を除けば基本的に話し手の心情や推測、疑問、願望、経験、事情、意向などを表す文が現れる。そのため、後続文で意見や主張、思いなどを述べるための前提を述べる役割を果たしている可能性があり、今後ディスコース（談話）単位で考察する必要がある。

形式名詞述語文と類似の構文として、すでに報告者自身の研究蓄積があったソによる係り結び構文について考察したものである。この成果により、今後、形式名詞述語文や関連する構文についても、ディスコース単位の機能や役割という観点から考察することで、より各構文の機能や役割が明らかになることが期待される。

(5)中古の連体ゾ文の用例を採集し、その用法や特性について考察した。

現代語のノダ文には以下のような用法があることが知られている。

知識表明文

「この店は江戸時代に創業されたんです」

判断実践文

「そうか、こっちを先に開ければいいんだ」

想起文

「そういえば、ここにしまったんだ」

このうち、連体ナリ文は知識表明文にしか現れないという指摘がすでにある。しかし、本研究において、連体ゾ文においては3種とも中古の実例が少なからず見られることがわかった。

モノナリ文やモノゾ文とも異なる用法を担っており、(1)(3)同様、各構文それぞれに特性や役割が異なることがわかった。

(6)中古において「連体形+コトナレバ/コトニテ」という形式が原因理由を表す節となる場合について、以下の点を指摘した。

コトナレバ節とコトニテ節の多くはコトが名詞としての性質を残しているが、「節の体言化（名詞節化）」が認められる例も少数

ながら観察される。

コトナレバ節とコトニテ節が表す事態には、狭義の現場性が無い。

コトナレバとコトニテによる原因理由節は、帰結部の前提となる「状況」を原因・理由として述べる表現である。

コトナレバ節とコトニテ節に、複数の原因・理由の存在が含意される用例がしばしば見られるのは、及びの性質を反映しているものと考えられる。

中古において、形式名詞述語文が従属節を構成する場合について、コトナリ文を対象に調査を行ったものである。

(1)の調査から、中古のコトナリ文が主節で終止形終止する場合には、名詞述語文と同様の構造であることがわかっている。そこで、従属節でも同様であるかを原因理由節を対象に調査した。

その結果、コトに係る連体節の主題がモノを表す名詞で、しかも連体節と主名詞（被修飾名詞）コトとが「外の関係」となっている例が、少ないながらも観察できた。

このことから、コトニテ・コトナレバの一部の用例においては、コトが名詞性を失い、連体節とコトが一体となって従属節を構成していると考えられる。しかし、その一方で他の大半の用例はコトが名詞性を保ち、また、主節の終止形終止用法でも名詞性が保存されていることなどからすると、コトナリが助動詞や接続助詞といった文法形式への変化という意味での「文法化」をしているとは考えにくい。

あくまでも一定の構文条件が整った場合に、文としてそのような働きをするのだとすれば、これは「構文化」とでも呼ぶべき現象である。そしてそれは、従属節から主節へと拡大するモデルが想定できる。

その詳細やすべての場合に同じ方向性なのか等は、今後明らかにしていく必要がある。

本研究によって、形式名詞述語文の機能や役割を考える上で、他の類似構文との共通点・相違点を探る観点や、形式名詞が述語や補語と言った構文のどこに現れるのかといった分布を見る観点、主節と従属節を分けて分析する観点の有効性をある程度示すことができた。

同様の観点からさらに調査を進めることも重要であるが、本研究から得られた新たな観点として「ディスコース単位での機能・役割」についても、今後調査を進めていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

勝又隆、中古和文における原因理由節を構成するコトナレバ・コトニテについて『源氏物語』を中心として、福岡教育大学

国語科研究論集、査読有、58号、2017年、
31-48

勝又 隆、古代日本語におけるモノナリ文
と連体ナリ文の構造的差異について、西日本
国語国文学、査読有、1号、2014年、58-71

〔学会発表〕(計7件)

勝又 隆、中古和文における「連体形+ソ」
文の構造について、名古屋言語研究会例会
(第151回)、2016年12月24日、名古屋大
学東山キャンパス(愛知県名古屋市)

勝又 隆、On the position of the Old
Japanese Kakari Particle so and the focus
expressed by the clause (上代における係
助詞ソの出現位置と文の焦点について)、国
際ワークショップ「比較的观点から見た係り
結び」、2015年9月5日~9月6日、国立国
語研究所(東京都立川市)

勝又 隆、上代における「連体形+形式名
詞」節の分布について、名古屋言語研究会例
会(第129回)、2014年12月20日、名古屋
大学東山キャンパス(愛知県名古屋市)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

勝又 隆 (KATSUMATA, Takashi)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：60587640